第3章

口誦と文字テクスト

——九州盲僧琵琶をめぐって——

山下　宏明

1　国文学のなかの『平家物語』論のゆくえ
2　共同研究から学んだこと
3　九州琵琶の調査
4　筑前琵琶のテクスト
5　薩摩琵琶のテクスト
6　小町物のテクスト

1　国文学のなかの『平家物語』論のゆくえ

『平家物語』論の流れには、いくつかの期を画する動きがある。この点については、これまでしばしば論じてきた(1)ところであるが、戦後の動きを今改めて簡単にまとめると、

(1)　歴史社会学派が主流となった叙事詩論と、これに平行して作業が進められた古態論がある。諸本の比較研究から、物語の原態を探ろうとするもので、その根底には、ヘーゲル美学のジャンル論がある。一方で、古態論よりは、主として覚一検校が定めたという語り系テクストの内在的な語りを探る語り論が行われた。その展望については、兵藤裕己の論(2)がある。

(2)　前項の語り論と重なりながら、いわゆる語り系テクストの実態調査がある。特に、いわゆる八坂系諸本をめぐる調査、位置づけに関わる共同研究(3)によるものであった。その結果、現存諸本の間に見られる相互の書承関係や、本文の混態現象が指摘され、これらを「語り本」と称することに疑問が提起された。それとともに、前項ともかかわるが、いわゆる口誦と文字の関わりが問われ始める。J・オングの『声の文化と文字の文化』(4)の翻訳が刊行されるのと平行してあらわれた動きである。

(3)　こうした動きと平行して、肥後を中心とする九州の座頭琵琶の調査を拠点とする兵藤裕己の口誦論のあることを注目せねばならない。実は、早く山本吉左右の瞽女唄をめぐる成果(5)があることを承知していたのだが。それにこの兵藤の口誦論(6)は、座頭に視座を設定することで、リアリズム論をよりどころとする叙事詩論をも相対化してしまったこ

とを見落としてはならない。極言すれば、これまでの文字文化としての国文学全体を相対化する可能性をも持っている。氏のちくま新書の『平家物語－〈語り〉のテクスト』1998年9月もその結論を示すものと言える。

兵藤の論を契機として口誦の世界が脚光を浴びる。にもかかわらず、諸本の古態論や、八坂系諸本の研究、さらには一方流諸本の研究が見られるように、各種の本文テクストが伝わり、「語り系」なる用語が用いられた。それを裏付けるように、中世から王朝知識人の記録に『平家』の語りや諸本をめぐる記録が見られること、それらのテクストとは無縁ではありえない、『太平記』などの他の軍記物語、さらには能や幸若舞など中世芸能が成り立つ上でも、いわゆる語り系諸本のテクストの存在したことを否定できない(7)。盲人の語りを、語り系テクストとする、つまり口誦の語りが文字を前提とするという自己撞着をどう解釈するのか。と言うよりも、今回の共同研究を通して学んだことだが、現実の語りの行為そのことが、視力の有無の別を越えて、文字テクストの存在を無視することがありえた(8)ことは、今日の、落語や講談といった口誦芸能、さらに中世に遡れば、中世の狂言にも見られるところである。中世の狂言に演出の指示はあっても定まった台本は無かったらしい。文字テクストに拠り続けてきたわれわれとしては、自己の足場をも揺るがす、この語り論の行方を見届けることを怠ってはならない。しかし何はともあれ、中世の語り、特に「物語」として解読することに努める限り、それらが現実の語りとは乖離しているとは言っても、これらの文字テクストに頼るほかない。こう言ってしまっては、せっかくの課題提起をまともに受け止めることにはなるまい。口誦論が提起する課題を受けとめつつ、文字テクストを拠り所とする立場の確立が必要となろう。今回の共同研究の大きな成果として、音楽学からの参加がある(9)とともに、この現存する語りの側からの発言が、文字テクストのみを拠り所とした、いわゆる国文学のありかたそのものに再考を促したことを評価したい。特にわたくしの場合、今さら兵藤(10)のような新しい資料の発見や現地調査は望めないにしても、これまで蓄積されて来た九州の盲人を中心とする琵琶楽の語りの成果を、わたくしなりに受けとめてみることが課題になるものと思う。

2　共同研究から学んだこと

1998年9月18日、わたくしは今回の表題を掲げて報告を行ったのだが、その際に第1回の5月以降の報告から学んだことを、わたくしなりに受けとめておいて、それらの要約を行ったのだった。すなわち、兵藤裕己同様に、肥後琵琶を直接体験したヒュー・デフェランティは、「潜在的にテキストにもとづいているオーラル・コンポジション――座頭語りの例から」と題して、九州琵琶に、晴眼者の暗誦のための文字テクストが存在すること、しかしそれらの文字テクストは、直接、口誦には影響を及ぼさず、それはまさしく定本としての台本であ

り、その存在が口誦の際の暗黙の了解になっているとした。盲人の大川進が、座頭系ながら晴眼者の宮川教学一世から学ぶという実績のあったことを報告したのであった。

ついで、永年、幅広く邦楽や芸能に接し、常に現存する語りの分析から中世を探ることをモットーとした横道萬里雄は、「語り物の概観」と題して、語りの曲節名などの細分化が、実は、それを意識化する過程で記録される、言い換えれば、細分化の明示のないことが、ただちに曲節分節の単純であったことの証拠にはならないとした。(この理解に誤りがあればおわびする) これは、例えば『当道要集』などに、平家琵琶の曲節が、ただちに少数から多数に分化したとする論じ方にも疑問を呈することになる。それは例えば能の謡い本の曲節や墨譜の記載のしかたを見ても明らかである。世阿弥の自筆本にも見られるように、本来、曲節などは口伝を旨として表記しないものであった。それが専門外の人々の参加を得るために、江戸時代に、その稽古本としての譜本が成立したことは、謡い本の場合に見られることだし、それは平家琵琶の場合にあっても、江戸時代に制作された譜本そのものが、この経過を雄弁に物語っている。それに、事実、中納言鷲尾隆康の日記『二水記』の天文2年 (1533) 正月24日の条には、般若心経の読経の場で、数献に及んだ後、その樽を献上した龍池院その人の行ったこととして、

平家語之、只如当道座、尤奇妙也。聊有音楽、慰乱世之心、有興云々

と見える。現存はしないが、何らかの写本、特に譜本があったのかも知れない。事実、『二水記』には、大永3年9月7日の条に、

(田寺) 喜一建業 (検校) 十六才云々、墨一勾当両人祇候、平家七八句語之、

と見え、当道座の琵琶法師が、その周辺に出入りしていたことがうかがえる。

永年、アフリカに無文字の世界の口承世界を探求してきた川田順造は、「語ることの位相」と題して、ヘイドン・ホワイトの理論を援用して、「歴史」ということを考え、その語りのあり方に、語りの言葉の時制と詞、場を考え、語り手が現前する際の開かれた対話的状況の見られることを論じた。この対話的状況については、それまでに国文学の世界でも、例えば『源氏物語』をめぐる草子地について論があり、『平家物語』の文字テクストには、これらが見られないことを論じてきた。その川田が、二人称語りに注意を喚起したが、それは近代の大岡昇平の『レイテ戦記』に

> 空の見えない高みから、電光のように降りて来てきみの進路を突つ切り、弾を撃ちながら下の方の空間へ抜ける。或いは意識するひまもなく、きみの身体は銃弾に貫かれて、機が落ちて行くのか、意識が落ちて行くのかわからないまま、ときには暗に死の中へ落ちて行く。

と見え、亀井秀雄[11]は、これに死者が立ち上って来るような幻想を感じている。この二人称の語りは、時に葬儀の追悼の弔辞にも見られる語りである。

この口誦の語りと文字の問題について、井口淳子は、「中国農村の語り物におけるテキストの「改編」」と題して、中国河北省の農村の現場に行われる「楽亭大鼓」をめぐって、文字テ

クストの相対性、無意味性を論じた。しかも、その語り手は盲目ならぬ晴眼者の語りにおいて見られる事実であった。文字テクストは存在しながら、実態は、演唱者の即興に委ねられる語りであることを論じた。この井口の論は、上述もしたとおり、わが国の場合においても、近くは落語の世界があり、古くは狂言の世界にも検証されるあり方で、これまで平家琵琶を論じるのに、盲目ゆえの無文字を考えて来たことが、根本的に誤りであることに注意を喚起する報告であった。現実の口誦としての語りにあって、文字テクストは、一つの手がかりであっても、その文字テクストに厳密に拘束されることはなかったものと考えられる。文字テクストは口誦そのものとは異次元の世界である。こと『平家物語』に関しては、名古屋に在住の、もしくは在住した盲人師匠の語りは、あたかも現行の能の謡いの場合のように、事前に語りを重ねた上での暗誦による語りであった。これを本来の語りとは異なると言うのは言い過ぎであるにしても、中世の平家琵琶のすべての語りが暗誦によるものであったとするのは不当であるのだろう。前記、川田の言う、テクスト内に、開かれた語りの存在しないことを合わせ考える場合、現存の『平家物語』の文字テクストは、やはり語りから文字化を経る際の、語りと文字の交流の上に成り立ったものであるとしなければならない。その文字テクストが、巻の構成に始まる物語としての編成の過程を経ることは、きわめて当然の結果である。この点については、これまでにも論じて来た(12)ことだが、今回、これを九州の琵琶楽に検証することが課題となった。

3　九州琵琶の調査

口誦の世界と文字テクストの世界の関わりを考えるのに好都合な素材が九州の琵琶である。身近な存在として筑前琵琶や薩摩琵琶がある。いずれも晴眼者の語りで、文字テクストに拘束される傾向が強い。しかし一方で、盲人の語りが、かすかではあるが今なお伝存する。今回の調査は、きわめて限られた時間内で行わねばならなかったことから、熊本大学の安田宗生、久留米在住の島津正に会い、両氏から提供された資料を利用した。ここに謝意を表する。特に安田には、貴重な『肥後琵琶便り』の提供を受けた。これも初期のものは鹿児島在住の野中哲照からも提供されている。ここに謝意を表したい。以下、主としてそれらの資料をもとに、言説そのもののあり方を考察する。いわゆる「語り」のありようを探る。

肥後琵琶の台本、『頼光跡目論』(13)は、熊本県鹿本郡在住の中村均の所蔵するもので、校訂者である原口長之（山鹿市立博物館長）によれば、

> 肥後琵琶盲僧琵琶としても使われたが、一方では趣味、教養の具として上流社会で盛んに弾じられた。この台本はそれに使用されたもの。……奥付に「太夫晴順」とある。筆跡からみて、おそらく所有者の名であろうと思われる。……明らかに、あて字、誤字と認められるものは訂正した。

とあるが、そうは言いながら、なお

　各工夫を得斗（とくと）納め

　驚をさみする心庭（心には）近ごろ以て慮外たり。

の当て字が残存する。源頼光が病にかかり、跡目後継者の選定をめぐるお家騒動ものである。原本には、このような当て字がかなり見られるのであろう。冒頭の

　諸行無常と響きつつ菩提をしらする遠寺の鐘、生者必滅四季転変の花の色、定めなきは娑婆世界……

は、明らかに『平家物語』の序章を想起するもの。口誦的世界としてある語り物が、このような言説の基本的なモチーフを冒頭に掲げ、以下、

　ここに六孫王のおん孫多田の満仲の御嫡子、摂津の守源の頼光は、……

と語り進めるのは、こうした語り物の定型であったこと、『平家物語』自体が、実は、こうした語り物の定型を再現したものであることを示唆しているのだろう。在地の語りから、文字テクストの成り立ちを探る手がかりが得られる。

途中、第二、馬揃、第三、塩釜の段落があり、

　治まりなびく日の本の、源氏の威勢ぞめでたけれ。

　浜の砂は尽きるとも、源氏の御代はよも尽きじ。

などの源氏賛歌の色彩が濃い。中世から近世にまで及ぶ源氏賛嘆の文化史的状況[14]が、ここまで及んでいたことを物語っている。しかし、その言説に川田の言う開かれた語りは見られない。文字テクストとしての定着度が高いためであろう。

『菊地くづれ第十席』[15]は、山鹿良之の口演を亡父祐章の遺志を継承して木村理郎が記録したものである。鍋島加賀のお国相続ものの１曲である。前の『頼光跡目論』同様、江戸時代特有の、お家騒動ものがいくさ物語としてあった。そのためにその記録には、

　隆信の首を葬り、竜造寺も消滅したとみえましたが、……

　なんなく肥前も高瀬もおさまるという話のたとえがあります。

などのていねい表現が見え、聞き手がテクスト内に存在する。つまり川田の言う、開かれたテクストなのである。記録者の木村が

　『菊地くづれ』はどうも人により、そして１人の人でも色々にあるらしいことがわかりました。……「山鹿良之氏の場合は、師匠より口移しで全部教えられたものではなく、“大意をつかんで小さいところは自分で工夫せよ”と突き放された」ということと関係がありそうな気がします…

と言う。

　口述筆記、または録音したものをおこす作業にとってかなりの困難を生んでいる事実があります。

と言うとおり、口演の語りをかなり忠実に残すものだろう。数年にわたる父子２代の記録の間に、山鹿の語りそのものに変化があったことを記録者は回想している。

永松大悦の筆記、木村祐章の校訂による肥後琵琶台本『玉依姫一代記』がある(16)。全体が一段構成で、段落の切れ目を有さないが、話の切れ目に

扨又(さてまた)爰に下野上野出羽の国、これ三国の主に……

扨又黒田の八郎道康は急ぎ高倉に立帰り、……

扨又宗継は城の内そとやかしこをさがせども……

扨又姫君を引出し……

扨又三輪藤太を召し捕り……

偖又姫観世音の御申子に候へば、……

など「さてまた」という繋ぎの語が各所に見られて並列的なストーリー展開を示す。それに、もとはと言えば、京都三条高倉右大臣家の、いわばお家騒動もので

斯て御家次第次第に繁昌して菊池の御館と九州の諸大名代る代る登場して救いける。弐拾七代の剣は鞘に納めて弓は袋に治め千秋万才納まる御代ぞ目出度けれ。

と祝言で語り納める。浄瑠璃を思わせる語りの言説である。山鹿の語りが開かれているがゆえに，江戸時代から明治に及ぶ諸芸能からと関わりを見せたことは、充分に可能性のあることである。むしろ、それらとの関係がないとする方が不自然である。ただし聞き手に向けての、開かれた語りは見られない。口誦の世界であったものを、口誦の形態を活かしつつ、物語として再構成したテクストであるのだろう。それに、これはずいぶん昔のことであろうが、たぶん肥後琵琶を調査した友人ケネス・D・バトラーから贈られたものかと思うが、『玉代姫筑紫下り』の写真が手許にある。その本文は、この『玉依姫一代記』とほとんど同文である。「玉代姫」は、「玉依姫」に通じるだろうし、その「筑紫下り」とは、その主役が筑紫へ下り、上述の大団円に終結することと通う。おそらくもともと同一の写本であったものを一部改題しつつ写したものであろう。この事実からも、元はと言えば口誦の世界がいったん文字テクストとして固定されると、それが写本の形で転写を重ねる過程のあったことを物語っているのであろう。その背後に定まったテクスト（正本）を必要とする結社組織があったはずである。

山鹿良之の口演テープを木村理郎の筆録した『端唄小野小町』が伝わる(17)。木村の解説によれば、山鹿が大正11年、天草の江崎初太郎に内弟子入りした時に教わった習い初めの曲だったらしい。そのせいか

小町は何一つとして何の返事もなかりける。……小町、今やおそしと待ちにける。……と一首読ませたもうて御最後なさりけり。

など文語調の箇所があって、かなり固定的である。師匠から口移しに教えられたものか。習い初めの曲と言われる所以であろう。「端唄」と言いながら、20分もの長さがあったと言う。しかしながらその結び近くには、

みなの人、私のいうことよく聞きおぼえて下さりませ。……みなの人、小野小町ばかりではござりません。……

など、聞き手への呼びかけがあり、開かれた語りであるのは、上述のとおり口演の筆録であるからであろう。このように口誦の語りの台本化は可能であって、保存会の使命の一つと考えられた。この事実は、中世の『平家物語』の語りと、その文字化の場合を考える上でも示唆的である。保存をはかるための文字化、固定化があったはずである。覚一本の『平家物語』の奥書をも、この趣旨に即して読み直すことが可能だろう。

同じ山鹿良之の語る『柳川騒動』がある[18]。肥後の熊本城をめぐる細川・柳川と石田三成の攻防を語る中編の物語である。

これより馬場小路が上を下への大騒動如何になりますか次の段。(第一席の末)

心細く萩乃が如何なことに相成るか末は血の雨降らすという、馬場小路の大混雑、如何なる次第なり。(第二席末)

この曲者の身の上どうなりましょう、御席改め次の段。(第三席末)

又来る弾は急所を望んで命中し、六郎はつたと倒れ後は如何なりますか。(第四席末)

如何納まりつきましょうか、巡礼の身の上感ぜぬ者こそなかりけるか。(第五席末)

如何、騒動になりましょうか、感ぜぬ人こそなかりける。(第六席末)

など、段の切れ目が顕著であり、それにていねい表現から、やはり聞き手に開かれた語りであることが明らかである。ただし、その筆録者は未詳である。

肥後琵琶の「地方もの」の一つに、落城の悲話『和仁合戦』がある[19]。島津征伐を志す太閤秀吉の臣下、佐々成正が、主の命に背いて現地の検知を行って国人衆と対立する。玉名郡和仁の田中城を守る勘解由親実と、成正に通じる辺春親行の間のお家騒動ものである。所蔵者の古川の翻刻による明治26年の写本がある。五段構成から成り、

それ、つらつらおもんみるに邪にありて奢る者は久しからず、たとえばここにしられける。さるは人皇御代はじまつて百七代の御帝、正親町の院の御宇、当時の武将は是、さきの関白太閤秀吉公、六十余州を切り従え、音に聞こえし山城の伏見の城に御座を据ゆ。

……

以下、物語の主人公、肥後玉名の和仁の勘解由親実を登場させる。一門を裏切る親行への、『太平記』まがいの批評を物語の序にすえ、物語の主人公の登場へと、いくさ物語としての形式を整えている。各段も

まことに田中の城内は如何成べき次第ぞとあんぜぬ者ぞなかりける。

まことに親実の御身の上は如何はなすべき次第ぞと、思わぬ者ぞなかりける。

弾正人鬼が身のうえは天晴無双の兵の其名は代々に伝えける。

紅いにそむる如くにて血の波立つて流るれば今の世までもこの川を血波川と言伝えける。……田中の城の人々の武勇は今に隠れなき。

と切れ目が明確であり、その序文とともに『太平記』に似て、語りの今に視点をすえる姿勢が[20]濃い。和仁の妻女の入水死を語って、

和仁の御前とたてまつる。ここに一社を建立し和仁石宮とぞ祝わるる。実に怨霊は恐ろ

しく御台親子の人々は渚の水の神になり今に水無月土用には和仁石淵より水神の和仁淵までの川伝いに御楽ならして登りくると今の世までも伝えける。

と、その死霊の供養を語る。いくさ物語に登場する女性と水神とのかかわる怨霊鎮めをモチーフとして見せる。それに、この主を裏切った辺春能登守親行を、

さても今の世の人にまで主をころせし天ばつと死後の末まで哀れを留めける。

と序文と呼応して懲悪の語りの色彩が濃い。橋口桂介の談として、入門時には暗誦させたものらしいと言う。

4　筑前琵琶のテクスト

九州琵琶のうち、薩摩琵琶と並んで、早くから中央に進出して愛好者を得たのが筑前琵琶である。そのテクストについては、『福岡県史』の文化資料編「盲僧・座頭」に、永井彰子の労作[21]がある。

資料編に2曲をおさめる。その『姫路合戦』は、大正15年、国武諦浄の定めたものである。安芸・周防・長門三か国の主、豊田左エ門正勝の死後、遺児小太郎丸をめぐる、娘婿、播磨姫路の高松中将義平の横領と、これを防戦し、逆転をはかる、お家騒動ものである。全体七段構成で、

かの六郎が心の内は、後の乱が如何やと案じてこそは居られけり。

後の乱が如何やら、申すたとへぞなかりけり。

城内さいて陣を引く、彼の杉山が勢は潔いとの中々に、申すたとへぞなかりける。

桂の前の働きは、いさぎよいとも中々ほめぬ人こそなかりけり。

小太郎主従の御身の上は二度び御代の開くる随草（「瑞相」のあて字か）と案じてこそはゐられけり。

御代の開ける随想（前に同じ）と申す斗りぞなかりけり。

と、段落構成が顕著である。聞き手に向けて語りは開かれていない。しかし

渡るに舟、牛には粉ぬか、猫には鰹、女にや男と心得て……

彼の杉山より腰の背骨をふみ折られ、そうけ作りか傘張りか、とうで士やむつかしゆ御座る我君様……

又もよくよくたとへて見れば、鶏卵を持つて大岩石を打にたり……

どれどれカカアが合戦見物せんと、……ヤアヤアそこカカ負けんな「ヘコ」しめろ、マチツト踏み張れ、サケテモカマワン、マチツト踏み張れ……

などと、ギャグや猥雑さに在地語りの痕跡を見せていて、説教浄瑠璃との近さを思わせる。それに当て漢字も目につく。

左欄が本書の表記、右欄が正記法である。

迷道光線←冥途黄泉　　正賊←装束

安党←安堵

障らん節←さあらん節　　河用な←かやうな

初しと受とめ←はつしと受とめ　　三蔵良不←さん候

近江の槍←大身の槍

いずれも語りの場の声を重視した結果の現象であろう。

「音声」と言えば、能の詞章の懸詞が耳から入って来る音声に複数の意味を連想させる「コトバのゲーム」であることを想起させる。

『一の谷子敦盛』も、大正8年、玄清部国武諦浄の写しである。五段構成で、閉じたテクストながら、

それつらつらと思ん見れば、九ぶんに立つしけ戴の元、元を持つてほんとする、元乱るれば天が乱るる、天下大いにさわがしく、時人んばそれ万民の苦みたりいちようのきつ忠之成り、此処に三木経盛のばつ子武官の太夫敦盛卿と申するわ、既に年十六才、……

として序文の形式を整え、

敦盛卿の心の内は無念さよとも中々に、申すたとえぞなかりけり。

敦盛打て無念やとしばし咸(感)じて到りしが（以下空白）

玉折姫の御身の上が直もあわれの次第なり、申すたとへぞなりけり。

若君の行末は後が如何の次第やら、申すとたとへぞなかりけり。

と、段の切れ目が明らかで、「くれよ」などの俗語が混入する。

春か←遙か　　蒙つた←子を持つた

八斗←はつと

など、『姫路合戦』同様に、当て漢字が多い。書写者の国武諦浄（1901〜1984）は、父礼楽坊国武礼浄（1865〜1917）が盲人だった。父の死後、伯父にあたる盲僧宝山院森田順光についても習ったと言う。文字テクストが成り立つ、一つの場を示唆するものであろう。なお兵藤によれば、明治38年の内務省通達により晴眼者が諸流の継承者として認められ、昭和10年には、福岡県の盲僧寺の住職は、ほとんどが晴眼者であったと言う。文字化される過程で、規範意識が[22]働き、口誦が有していた語りかけは消失しているが、構成を整え、しかも音声の重視が当て漢字となって表れたもので、本来の口誦の痕跡を伝えるものと思われる。

5　薩摩琵琶のテクスト

久留米在住の伝承者、島津正から提供された資料[23]であるが、例えば『木崎原合戦』は、五段物で、

倩、世間の現象観ずるに、積善の家には余慶あり、積悪の家には余殃あり、尤も慎むべきは此道也、爰に薩隅日三州の太守、島津修理太夫義久と申し奉るは、……

と序文を備え、

兎にも角にも義祐の、その心の内こそ浅間しけれ。

国重兄弟の手柄の程は、天晴勇士誉れやと、皆一同に感じける。

兎にも角にも福永が所存の程こそ、天晴剛の勇士かなと、皆一同に感じける。

彼経高が手柄の程こそ、感ぜん者はなかりけれ。

と段落構成意識は明確である。大文字テクストとして定着し、その意味で、聞き手に開かれてはいない。盲人語りの痕跡が見えない。しかし、そのテクストは、一つの拠り所、定本としてあるもので、語り換えはあり得たと島津は言う。ちなみに氏は、九州大学工学部出身の元、電信公社の幹部職員であられた。今なお、日常、語りの学習を怠らないと言われる。

薩摩琵琶のテクストに上述の筑前琵琶『一の谷子敦盛』と関わりがあるものと思われる『小敦盛』が鹿児島図書館に旧蔵された。しかし実態は、『敦盛』と言うべきもので、その冒頭を

祇園生者の鐘の声諸行無常の響ありしゃら諸寺の華の色諸社ひつめつの理をあらはすおごれるものは久しからず貴き人は終に亡ぶる習なり扨も今度源氏平家の戦ひに平家方六人母衣大将也其内に物の哀をとどめしは無官の大夫敦盛にて諸事の哀れを止めたり。

とあるのは、明らかに『平家物語』の冒頭を引いたものである。『小敦盛』の冒頭を、同じ系列の薩摩琵琶歌（明治 42 年 10 月）では、

祇園精舎の鐘の声は諸行無常の響きあり娑羅双樹の花の色は生者必滅の理を顕す驕れる者は久しからず只春の夜の夢の如し猛き人も終には亡ぶる習ひあり時は元暦元年二月七日一の谷の戦に平家方一族幌大将の其うちに物のあはれを留めしは無官の太夫敦盛とこそは聞えけれ

とあり、前の鹿児島図書館旧蔵本には、語りの置き換えのあることが明らかである。しかも「諸寺」「諸社」の対立は、決して恣意的なものではなく、音声の類似を利用して、独自の解釈を施したものと見られる。言い換えれば、文字テクストとしての固定化を進めながら、この種の語り換えを行うところに口誦の世界に通じる痕跡を残すものであろう。

その言説であるが、熊谷と対決する敦盛が笛の小枝を忘れ置いていること、熊谷に問われて敦盛と名のる点で筑前琵琶の『子敦盛』と重なる。ただ、この薩摩琵琶の『小敦盛』は、

熊谷武士の情有故何と聞てもつらねても浮はせ中義理は直実物の哀をとどめしは無官の太夫敦盛に蓮正法師の後の哀諸事の哀をとどめたり浮世は尽せん物哉。

で終わる。この点、上述の明治の琵琶歌でも小異はあるが、熊谷の出家を謡い、

其名も蓮生法師と呼なして、新黒谷に引篭り三とせが程は明暮に百万遍を唱へつつ敦盛の追善をぞ営みける。無常と響く鐘の声夢かと醒る花の色昨日の淵はけふの瀬と変る浮世の習ひをば此敦盛と熊谷の身の上に見る哀れさよ身の上に見るあはれさよ。

と、やはり敦盛の死と熊谷の出家で終わっている。上述の「物の哀れをとどめしは……にと

どめたり」に見るように、説経浄瑠璃に類する口誦の型も散見する。ただこれが筑前琵琶では、敦盛の死、熊谷の出家の後、その後日談として、敦盛の遺児、法童丸と法然とのめぐりあいへと展開する。『小敦盛』の外題の由って来るところであるのだろう。それが薩摩琵琶では、外題の根幹を語る遺児の後日談を欠落してしまった。それほど『平家物語』のかげが濃いと言うことか。

6　小町物のテクスト

前節において、敦盛をめぐる薩摩琵琶と筑前琵琶との比較を行った。肥後琵琶をも加え、九州盲僧座頭琵琶には、その演目に共通するものが多く見られる。網羅的な調査は行っていないが、本稿の課題である口誦と文字テクストの関係を考える上では、数例の比較からで、ある程度の見通しを得ることも不可能ではない。小町ものをめぐる肥後琵琶と薩摩琵琶が、やはりその好例である。肥後琵琶の『小野小町』は、山鹿良之の口演を木村理郎が筆録したテクストである。両者の間で

1　小町の出自。
2　少将に百夜通いを促す。
3　少将、百夜通いの後、小町の策にはまり、川に落ち水死する。
4　その報いをうける小町。

という、4つのモチーフに異同はない。ただ結末の、報いを被った小町のなれの果てが、肥後琵琶の場合、

少将卿の恨みなるかな目界を失なう。夜がいつやら昼がいつやら、日光の光もわからぬようになり、

という失明であるのに対し、二段構成の薩摩の『小町問答』は、少将の入水で一段目を切り、

扨小町は明けて弥生の末になりぬれば、あまたの人のおもひも積れるか、又は少将殿の怨念か、四百四病の外、癩の病ひ身に起り、

と、当時、業の病と言われた病にかかったとする。両者の間では、老いの身の小町が、肥後琵琶では、

花とみて枝折る人はつらからで風にしなわぬこの身のつらさ

と詠むのを、薩摩琵琶では、

花を見て枝をる君はにくからで風にしらべぬ身こそつらけれ

とあり、小異にとどまる。肥後琵琶では、

みなの人、我のいうことよく聞きおぼえて下さりませ。……みなの人よ、小野小町ばかりではござりません。今遺言のとおり、人の身の上とは思うなよ。我が身の上と思われよと……小野小町の物語。

と結ぶように、口誦ゆえの、開かれた言説になっている。なお、薩摩琵琶の場合、後半、少将が81歳の僧に身を変え、小町が腰掛けていた卒塔婆をめぐって問答する。この小町の物語の背後に『卒塔婆小町』などの、能や室町時代物語のあることを見逃せない。文字テクストとして定着する際に、その口誦において、文字テクストを離れて『平家物語』などの、中央の芸能が存在して、それらを取り入れつつ、語りの言説を構成していったものと思われる。

なお、兵藤が筑前琵琶の国武台本と森田台本の2種の『小野小町』を翻刻している。それによれば、いずれも、上述のモチーフに変化はないが、ただ、最後の「4　報い」について、

（国武台本）（少将の水死後）小野小町の末をみよのちの和が身にむくいくる。

（森田台本）（少将の水死後）小野小町の末を見よ末は吾が身の害となる。後に思を知られける。

とあるのみで、その具体的な報いの様子は語らない。

〔注〕

（1）「平家物語と説話文学論」『説話論集』2　1992年4月。（『語りとしての平家物語』再録）など。

（2）日本文学研究資料新集7『平家物語』解説　1987年5月。国際的学際的な視点による語り物の展望としてRuth Finnegan "Oral Poetry" Cambridge University Press 1977がある。

（3）『平家物語八坂系諸本の研究』（共著）1997年10月。

（4）桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、藤原書店　1991年10月。

（5）「口語りの論――ゴゼ歌の場合」『文学』1976年10・11、1977年1月。（『くつわの音がざざめいて』再録）

（6）「座頭琵琶の語り伝承についての研究」1　『埼玉大学紀要教養学部』1991年3月。氏の「座頭（盲僧）琵琶の語り物伝承についての研究（3）－文字テクストの成立と語りの変質－」『成城国文学論集』26（1999年3月）は、おそらく1998年5月発会以来の諸氏の研究報告を踏まえたものと思われる。氏は、1999年3月20日、共同研究の場で「芸能伝承における中世と近世」の報告を行った。

（7）1997年8月、コーネル大学での『平家物語』をめぐる集会でも、この課題を討議した。

（8）後述の井口淳子の報告。

（9）時田アリソン主催により、横道萬里雄・山口修・徳丸義彦・蒲生郷昭・同美津子・薦田治子・山田智恵子・小島美子・田中悠美子・藤田隆則・野川美穂子、その他、本書に名を連ねる方々。

(10) 注(6)のうち『成城国文』の論。

(11) 『個我の集合性－大岡昇平論』1977年5月。

(12) 『語りとしての平家物語』1994年5月ほか。

(13) 「肥後琵琶台本　頼光跡目論」『肥後琵琶便り』15号　1980年2月。

(14) 「源氏再興のいくさ物語」『文学・語学』1996年3月ほか。

(15) 『肥後琵琶便り』17号　1981年1月。

(16) 注(15)

(17) 『肥後琵琶便り』20号　1982年3月。

(18) 『肥後琵琶便り』23・24号合併　1984年3月。

(19) 注(18)

(20)　山下「歴史の物語としての太平記」『国語と国文学』1999年4月。

(21)　1993年11月、西日本文化協会編。なお注(6)の兵藤の成城論文は、この筑前琵琶を中核とする社会史的研究である。福岡県立図書館には42冊の『盲僧琵琶資料』があると言い、兵藤は、その中から4曲を翻刻している。

(22)　兵藤は、琵琶の本流を意識したことが台本を作成する一因になったとする。

(23)　島津正『明治以前　薩摩琵琶史』1997年6月。

(付記)　本書におさめるヒュー・デフェランティ、井口淳子の論は国際的な場で本稿や兵藤論に問題を提起する、その意味で、相互に補完したいところがある。